

10. 石動山の伝説

概要

石動山は霊山として古くから開けただけに、これにまつわる伝説が多い。越中側においても同様である。ただ、開山されたという年代の古いことや、中古しばしば戦禍の地となったこと、さらに明治の神仏分離による関係者の離散などから、消滅したものも数多いと考えられ残念である。

これに加えて近年は生活様式の変化や、社会世相の多様化、情報文化の過多などの推移から、これを語ろうとする人も少なくなった。これらの理由から聞き取り調査は、困難をきわめた。収集した伝説を通観すると、次のような特色がみられる。

石動山伝説は、ひとつの信仰事実から派生して、語られているものが多いので、これを事実として信じようとする人々の熱意は驚くほど強い。伊須流岐比古神社の『石動山金剛証大宝満宮縁起』（古縁起）や『伊須流岐比古神社縁起書』（新縁起）、（Ⅱ石動山の歴史の章参照）などのなかには、信仰活動から生まれたと解される伝説的内容の要素をもつ話が、幾つかみられる。

石動山の伝説のなかには、「動字石・梅宮の祭り・イワシが池」（Ⅺ石動山信仰と祭りの章参照）など、きわめて壮麗な密教の影響による上層文化を伝えるものから、「未練坊・人喰虎の軸」などのように、人間の業のきわまる姿を語る下層の生活文化のものまでと、多層性をもつ。しかも、信仰・自然・生活・芸能・戦いなど、誰がいつ作って語られだしたかは分からないが、巾広いものがみられる。

今一つの特色は、“言霊の幸わう国”といわれるわが国だけに、民衆の過去への想いや、自らの歴史への限らない創造・熾烈な生きざまの投影などがある。石動山の伝説においても、文字をもたなかった遠い昔から、人々の口語りとして、身近な山や木や井泉や路傍の一塊の石などにまでたくして、伝承されている。

「蛇が島・二所の滝・不動の大椿・西行もどし岩」など、自然の事物をもって語らせている。それ以外に伝達の方法がなかったことにもよるのであろうが、一面、事物によって記憶を甦らせ、より鮮明にして後代に伝えようという、生活の知恵も生かされている。

石動山の伝説の背後には、このほか歴史とはひと味ちがった、別の根のあるものもある。「海を渡った石動山神・五社権現の系譜・八代仙地藏・霜右衛門・堀切界」など、昔の人の気持や考え、物の見かたや暮しぶりなど、そのころの世の中のありさまや生きざまをうかがい知る、手がかりを得るのに格好のものがある。あるものは荘厳に、あるものは悲しく、勇ましく、面白く、美しく、祖先の夢やロマンや、叫びがさまざまに織りなされ、この地の人々の心のふるさとをのぞく思いで、ほほえましい。

このように伝説は、一回生起的現象を語ろうとする性格から、歴史化の傾向をみせるが、歴史ではない。虚構の世界である。しかし、それだけに歴史とは違った、風土性をもった、民衆の伝承的な真実の世界がある。一つ一つに込められている民衆の息吹や、真意が感じとられるのである。もっともっと多くの伝説を発掘し、たぐりよせ整理することによって、明日を考える力を得る糧となるものと思われる。今回はそれだけの時間的な余裕がなかったので、このことについては他日にゆずりたい。

1. 自然にまつわる伝説

(1) 蛇が島 (姿)

蛇が島は、昔は蛇が島といわれていた。そのわけは、石動山に「蓮池」という池があった。この池に大蛇が一匹住んでいたが、ときどき人々に害を与えるので、みんな困りはてていた。それで里人たちは石動山の修験者に、何とか退治してもらえないかと、たのみこんだ。

やがて石動山では、3000人の僧兵たちのなかでもこの人ありといわれていた豪僧が一人選ばれて大蛇退治に行くことになった。腰に大太刀を差し、つるつるした頭に鉢巻をしめ、池の端にかくれて大蛇の浮きあがってくるのをまった。

一時たった頃、急に池の水面に波が立ち、ゴーオッという音とともに、突然大蛇が顔を出した。豪僧は「いまだ」と思い大太刀を抜きざま、ええっ、と大蛇の首筋めがけて斬りつけた。そのひと太刀がみご

とにねらいたがわず、大蛇の急所にあたったらしく、「ぎゃあっ」とものすごい悲鳴をあげて、頭部が空中高く飛びあがり、やがてこの島に落ちた。しっぽの方は焼尾の地に落ちた。それからこの島を蛇島と呼ぶようになった。

ところが、このことがあってからというもの、島の沖を通る舟が、たびたび難破した。だれいうとなく、「これは、あの大蛇のたたりだろう。」と噂されるようになった。里人たちは石動山でご祈禱をしてもらい、その時「蛇」の字を改めて「虻」の字にし、「虻が島」と呼ぶようになったのだそうだ。

虻が島は、周囲を海にかこまれた小さな島だが、そこに清水の湧き出る深い井泉が一つある。その井泉には、次のような話が伝えられている。

この淡水は、石動山の焼尾にある蓮池の水と通じていたのだという。大昔、まだこの島が「阿無屋島」と呼ばれていた頃、この蓮池に棲んでいた大蛇が、この井泉へたくさんの子供をつれては、遊びに来ていた。

そんなことを知らず、時どき、この島へ船を着ける者がいると、ことごとく大蛇に害をされた。そのため一時この島を里人たちは、「蛇が島」と呼んで恐れるようになった。

この井泉の岩囲みも、波浪のために岩角が崩れて、海水が流れ込むようになった。

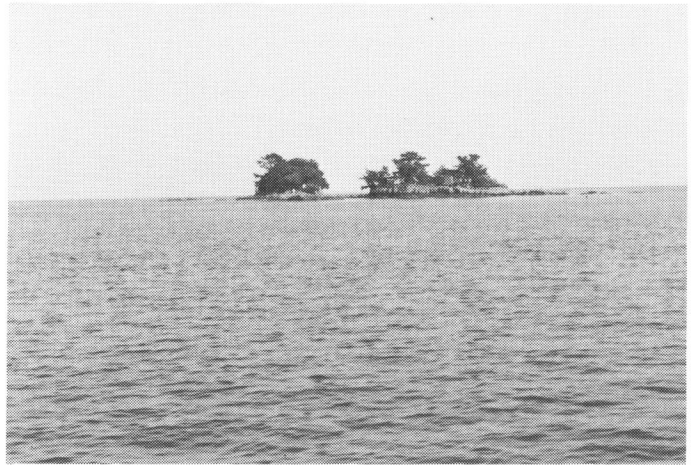
大蛇たちは塩水はきらいで、おられなくなったので、亀になって姿を隠してしまったという。今も虻が島ではこの井泉を「蛇が池の跡」という名で語り伝えている。

また虻が島のめぐりには岩礁が多い。これは天正十年頃、石動山の僧徒たちが越後の上杉景勝をたよって、寺領を減らされた前田利家に敵対する計画を進めていた。越後勢は海路を来航して、虻が島に船を泊め、先鋒はすでに対岸の中田浦の丘上に進み、一夜の幕営に夢を結んでいた。

一方、景勝の命を受けて兵3000を率いて救援にきた本隊の、井津木弾正の兵船数十隻は、ようやく虻が島に着き、船を繫留して石動山のようすを見ようと、遙かな雲の彼方を見ると、戦火の煙のたち昇るところであった。——あの煙のさまは、ただごとではない。敗北して、敵に火を放たれ、炎上しているのにちがいない——と多くの諸将はうらめしそうにそれを眺めていた。弾正も、「さてはひと足おそかったか。」と船べりをたたいてくやしがった。

この折、越後勢が、将兵がいかに多く乗っているように見せかけるため、船縁にわら人形をたくさん立てて偽装し、吃水をさげて船を重そうにしようと、積んできたたくさんの石塊を、敗戦を知ってこの海中に捨てたと伝えられている。こうして越後勢は空しく帰還していった。虻が島には、この時から、いろいろの岩が周囲に残り、岩礁となったのだといわれている。

(話者広沢周曹・寺崎こそ・採話者三野宗二)



(2) 二 所 の 滝 (長 坂)

天平の大昔の頃、奈良の都に御所の舎人^{とねり}を勤めている人がいた。この舎人に、楓^{かほて}というそれはそれはきりょうよしの、美しい娘がいた。都でも屈指の美人だったので、娘一人に婿八人、といったありさまで、もてはやされていた。舎人もまたこんな娘をもったことを、何よりの楽しみとして、会う人ごとに娘の自慢をしていた。

この舎人の家の従者^{くろうま}に黒馬という若者がいた。利口で勤勉な男で、日夜主人を大切にして忠勤を励んでいた。楓は物心ついた頃から、こんな黒馬を見て育っているうちに、思いを寄せるようになった。若い二人はどちらともなく何時しか、恋を語る仲となってしまった。

或る日、黒馬はこの胸のうちを、思い切って、主人の舎人に打ちあけ、楓を嫁にほしいと嘆願した。この事情をきいていた舎人は、身の程も知らぬうぬぼれ者めと、烈火の如く怒った。身分の階級制度が厳しかった当時のこととて、舎人は即座に黒馬に暇をだしてしまった。

悲しい思いをしながら舎人の家を出た黒馬は、いろいろ悩んだすえ、石動山にやってきた。山脈の美し

い木立のなかにある天平寺に詣でて、身も心も洗われる思いだった。やがて黒馬は、はかない世を捨て、恋の苦悩を癒そうと決心した。さっそくこの胸の思いを天平寺の僧、正方に打ち明け、今道心となって、日夜御仏に奉仕する身となった。

都では黒馬の去った後、楓は悶々とした日を送っていた。だがどうしても黒馬のことが忘れられず、遂に意を決して家を出奔し、諸国を放浪しながら、どうにか石動山天平寺にたどりついた。やっとの思いで黒馬を訪ね、別れてから後のつもる話などしながら、恋情をせつせつと訴えた。しかし、黒馬はもう過去の煩惱を断ち切り、罪障消滅に精進しようとする決意は固く、道心として修業する現在の心境を語った。そして楓に一日も早く都へ帰って親を安心させるよう説いた。

楓はこの著しい心境に変心した修業僧黒馬をうらめしくながめながら、身も世もなく嘆き悲しんだ。おもいあまった楓はやがて、都へ帰ると見せかけて、谷深い紅葉川の二所の滝に身を投じて、一命を断った。幾日かたってからこのことが黒馬の耳にも入った。——もとはといえば、わしが業から楓は生命を終えたのだ——黒馬はこう思うと涙がとまらなかった。このふびんな楓をとむらおうと意を決し、日ならずして黒馬も同じ場所に身を投じて、滝壺深く沈んでいった。

滝から落ちる水流がいきおいよく二つにわれ、しぶきを散らす姿は、あたかも二人の恋の物悲しさを語るかのように、滝壺近くで一つになり、ゴーウ、ゴーと音をたてている。愛する者どうしが、現世で果たせなかったねがいに来世で果たし、はれて夫婦として添え遂げる旅立ちのようなさまである。遙かに仰ぐ石動山からこのあたりまでは、七廻りもあり険しいが、それだけに春から夏にかけての緑蔭につつまれてはしる、滝からの曲折した渚の水流は快い。秋の全山の紅葉は、さらにこれに錦を飾ったようでいっそう美しい眺めである。

一方、都では楓の母親は、今か今かと楓の帰りをまっていたが、いくらたってももどってこない。母親は氣も狂わんばかりに心配になり、とうとう楓をたずねての旅を思いついた。——私はどうしてもあの娘をさがしてこなければならぬ。——と、野をこえ山をこえてあてもなくさがし歩いて、とうとうこの地までたどりついた。ひと在所ひと在所であう人ごとに、楓のことを話しては、知らないかとたずねていたら、「その人なら二所の滝へ身を投げて死なれた。」と話してくれる人があって母親は、石動山へ登ってきた。

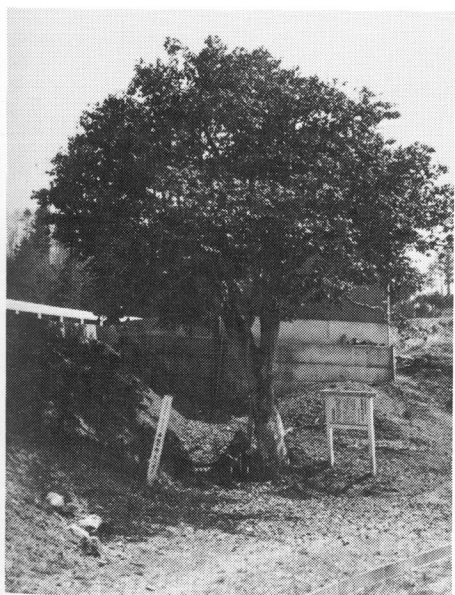
天平寺の修業僧たちから二人の入水のさまをきいた母親は、さめざめと泣いたあと、二人のために、天平寺で供養の法要を厳修した。供養を終えて山門を出た母親は、遙かに広がる有磯の海をへだてて、そそり立つ立山の連山を仰ぎながら、その雄大さに目を見張った。その雲間から、楓と黒馬の声がきこえてくるような思いがして、いつまでもいつまでもこの天下の絶景を眺めていたと伝えられている。

(話者 三野修道・採話者 高森 正)

(3) 不動の大椿

(長 坂)

昔、西行さんが石動山へ登ろうと考え、長坂まで来たら、日暮れになったと。それで西行は、——やれや



れ、ここまで来りゃ大丈夫、明日の朝石動山へ行けるわい——と思うて、ある家に一晚泊めてもろうたと。その家の衆はなかなか親切にもてなしてくれたと。じゃれど夕飯のしたくにえらいもたもたしとるふうやったので、どうしたがいいうてきいてみた。そうしたら、その家の婆さまが、「この在所は、こんな高い山の上にあるもんじゃけで、水がなあて困つとるがでございます。今も爺さまに、下の川まで水を汲みに行ってもろうとるもんじゃけで、てまどつとるがでございます。」いうたと。それをきいた西行は——それはなんぎなことじゃ——と気の毒に思い、あくる朝、外へ出たと。

あたりを見回わすと、すぐそばに椿の木が生えておったと。西行はさっそくそのそばに行って、手にもっておった杖で、椿の木の根元を突き、呪文を唱えて合掌すると、そこから水が湧き出して来たと。「さあ爺様、婆様、これからはこの水を使って達者で暮らさっしゃい。」といって、西行は立ち去った。里人たちはこの水のおかげで、これまでの難渋がなくなった。「椿の木の水、椿の木の水」といって、里人たちは珍

重がったと。

この椿は今では幹回りが1.95m、高さ約10mの大樹に繁り、「県の天然記念物」に指定されるまでになった。その根元に今も西行の井戸が残っている。いつの頃に建立したのか不動尊が建ってからは、「長坂不動の大椿」と呼ばれるようになり、里人たちから尊ばれておるがやと。

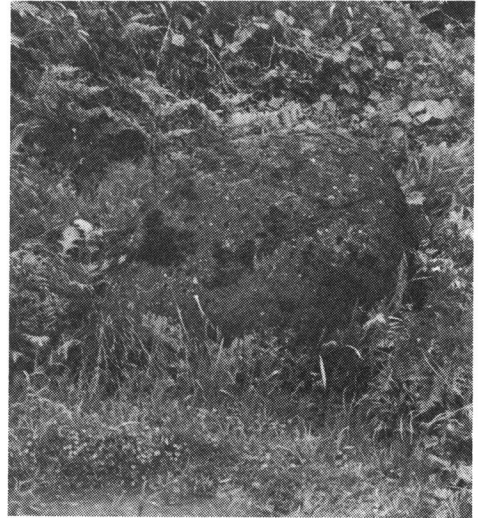
(話者 木沢はつえ・採話者 高西 力)

(4) 西行もどしの岩

(大窪)

石動山が一時 300余坊もあって栄えていた頃の話である。諸国を巡り歩いて修業をつんでいた西行法師が、氷見の地へ来た。——せっかくの機会だから、北陸で名高い石動山を訪ね、お詣りしていこう。——と、思いたち大窪口を登ってきた。途中で道端に大きな岩がころがっているのを見つけた。「お、これはよいところじゃ、どれどれ一服していこうかい。」と一人ごとをつぶやきながら、岩に腰をおろした。

この岩は、かつて石動山へ参詣するときの、表参道だったといわれている大窪口の道筋に、今もある楕円形の平べったい大きな岩である。長経約 1.5m、短経約1.25m、周囲約 5 m で、地表からの高さは70cm余りもあるのである。



汗を拭きながらしばらく休んでいると、平左衛門という土地の百姓が、でっかい^{おつ}吠のようにしたたてを背負って通りがかった。大きな荷をあまりにも軽々とかついで、山坂道を歩いてくるので、西行は、「でっかい荷じゃが中味や何じゃいの。」とたずねた。すると平左衛門が、「あ、この中味かいの、こりゃ21日や。」と答えた。西行は頭をかしげて考えたが、とんと分からない。それで、「21日ちゅうもんな、どんな物やいの。」とかさねて尋ねると、「お坊さまが、そんなこと知らんがかい。」と笑った。平左衛門は不思議そうな顔をして、「お前さま、どこからござらっしゃったがいけ。」と問いかえした。「わしは諸国を修業して歩いている、西行という者じゃが。」といいながら、あらためて1間(1.8m)ほどもあるたてを見ながら、どうにも分からんので、21日の意味を教えてくださいと頭をさげてたのんだ。「何、このようなことが分からないと。21はさんひち21というじゃろう。21日のことを別な言葉でみなぬかともいうじゃろがいけ。つまり荷の中はみなぬかじゃから軽いのや。」と教えてくれた。「なるほど、みんなぬかとは、これは参った。」と感心した。

西行は、——山の入口の百姓でさえ、このようにはしかい(かしこい)ものなら、どうにもならん。石動山中の僧たちはもっともとはしかいにちがいない。こりゃあ、わしはもっと諸国で修業をつんでからでないと、とても登る資格がない——と考え、とうとう登らずにもどることにした。それでこれから後、この岩のことを、だれいうとなく「西行もどしの岩」というようになったのだという。

西行法師が石動山詣りをあきらめて、ふもとへ向かって歩いてくると、付近の野でわらびを採っていた子供たちが、てんでんに採ったわらびを手にもって、向こうからやって来た。それで、子供たちに、「お前たち、でっかいことのわらび(藁火)をもって、手を焼かっしゃるな。」といってからかった。すると子供たちのなかの一人が、「坊さん、坊さん、お前さん頭にかぶとるもんなんじゃいけ。」いうてきいた。それで西行はなにげなく、「ひのき(檜)笠ちゅうもんじゃ。」と答えると、子供は、「坊さん、ひのき(火の木)笠かぶってずこ(頭)焼くな。」とやり返した。これをきいて他の子供たちも、「坊さん、坊さん、ひのき笠かぶってずこ焼くな。ずこ焼くな。」といって、はやしたてた。

西行はこれをきいて、びっくりした。——こんな小ちゃな子供たちまで、とっさにこんな頓智をきかせるとは大したもんや。さすがは北陸随一の石動山下だけのことはある。ようみんな学問しとるわい——。と舌をまきながら、こりゃ益々石動山へ向かわずにもどらにゃあかん思うて、帰って行ったという。

(話者 水本惣一・松沢為吉・採話者 円仏兵衛)

2. 生きざまにまつわる伝説

(1) 霜 右 衛 門 (吉 岡)

今からおよそ 300 年余り前、灘方一帯は 3 年続く凶作のために、難渋していた。お上へ納める年貢はおろか、三度の食にもこと欠くさまじゃった。そのためお上の下役人たちが、今日も明日もと年貢の取立てにきた。



これを見た吉岡の名主霜右衛門は、何とかこの窮状を救おうと再三に渡って年貢の免除を嘆願してまわった。しかし、お上からは一向にその気配はみられなかった。霜右衛門はいろいろあれやこれやと、心をくだいて画策したが思うにまかせず徒労に終わった。

こんな折、ふと思いついたのは、石動山の宮坊から、金子を借り入れて年貢の皆済をはかろうということであった。さっそく吉岡の有志ら数名を伴って、宮坊に出向き、このことをたのんだ。切々と窮状を訴えたが坊ではそれをきき入れてくれなかった。

嘆願を拒絶された霜右衛門の苦悩焦燥はことのほか厳しかった。——何とかしないとどこの家も餓死してしまう。——霜右衛門はもはや嘆いたり悲しんだりしている暇はないと叫んで、宮坊を襲うことを決意した。

こうして霜右衛門は或る夜、宮坊の土蔵を襲い金や米などを奪って、年貢の皆済に当てたのである。このさまに坊の寺僧たちはかんかん怒った。やがて主謀者である霜右衛門を捕え、奉行所へ訴えた。その結果吉岡にあった土蔵坊の前で磔刑に処せられた。

霜右衛門は架上にしばられながらも、「北山郷はこんな山上の寒村だ。にもかかわらず他郷と同額の年貢というのは苛酷である。村人の窮状を救って生計をいくらかでも楽にするためには、年貢の軽減の恩宥を仰ぐより道はない。」と叫び続け、遂にこの地の露と消えていった。彼が刑死したのは 3 月 18 日だったといので、明治に至って「霜津田神」として、吉岡・平・平沢の里人たちが奉斎するようになったという。この話は『氷見郡誌』に載せられている。

(話者 嶋尾正一。採話者 高西 力)

(2) 堀 切 界 (長 坂)

昔から石動山村も長坂村も、石動山の栄枯盛衰とともに生きてきた村で、かつては石動山天平寺の寺領に準じた管理をされてきた村である。萱場割・粗朶山割などのほか、2 官 8 民の山林割などが定められていた。これらを総称して総地割といい、村落共有の地という形で管理されてきた。

ところが、明治になって新政府が神仏分離の施策を打ち出したことにより、石動山が瓦解し、没落することとなった。これまででも、ややもすると両村が境界紛争をおこしてきたが、これまでと事情がかわってきたので、境界をはっきりしなければならないことになった。

それで、両村から幾人かずつの代表が出てきて寄合をし、境界をはっきり確定しようとした。しかし、どちらの代表たちもこれまでのいきさつを主張して、互いに譲らず何回寄っても、話がまとまらなかった。それでしかたなく、むずかしい議論をやめて、明日の夜明けの同じ時間に、村の中心を出発し、双方の出合った所を村境にしようということになった。長坂は下から上へ登るのだから不利だという者もいたが、だからといって別に他の名案でもなかったもので、長坂村の代表たちも、しぶしぶこれに賛成した。

この案は一見公平な案のように考えられるけれども、どう見ても長坂村にとっては大変不利な案である。石動山村は高い所から駆け下りる形であり、長坂村は逆に低い所から駆け登らなければならないわけだからである。代表たちが村へ帰って村人たちに寄合をひらいて、このことを伝えたら、あんのじょう、そんなばかな話はきかれるか、と議論が沸騰し、いつ果てるかわからない大混乱になった。

それで、そんなえこひいきのある約束なら、こちらは夜中早目に出発して不利を克服するようしてもら

いたいと、村人たちは代表の人たちに迫った。しかし、正直な長坂の代表たちは、そんなことをすれば明らかに協定違反である、と板ばさみの思いで困り果てた。それで思いあまった代表たちは、ここはひとつ光西寺の和尚さんに相談にのってもらおう。ということになった。

さっそく代表たちは光西寺の典座和尚のところへ行って、事情を語り意見を求めた。和尚は、「これはたしかに長坂にとっては不利な困った問題じゃ。だからといって約束を破ってよこしまなことをすれば、人としての信義を失い、末代まで石動山の人たちと仲たがいしなければならなくなる。そんなことになればそれこそ一大事、ここはひとつ約束を履行し、その上で全力を挙げて解決するより道はない。」と説得した。

いよいよきめられた約束の日が来た。長坂の代表の衆は一生懸命に山をかけ登ったが、結果は長坂の不利に終わった。長坂の一部の人たちのなかには、だからいわぬことじゃない。こんなばかげたことがあるか、といって承服しない者もいて、ごたごたが続いたが、「こんな信義を重んずる風こそ、これまで村を守って下された石動山神の慈悲でないか。たとえ娑婆の山境では損をしても、正直な村人達の心が守り継がれたことを喜ばなけりゃ。」と、また典座和尚に教えられ、やっとそれもそうかということになった。

明治8年、今後勝手な人為紛争をおこさぬ証にと、遂に両村の境界を掘り割ってそこに長々と木炭を埋めて、境界線とした。それから後、この境のことを「堀切界」というようになった。従来どこの在所でも村境というものは、分水嶺や河川など、自然の姿をそのまま境界とすることが多いのであるが、長坂村と石動山村との境界線は、こんないきさつから山の中腹にある。今なお目に見えていろいろの弊害も起こっている。だが長坂の人たちは、信義を重んずる村としての、心の誇りを思い浮かべながら、この石動山の中腹を長長とうねっている堀切境を忠実に守って眺めている。

(話者 三野修道・採話者 高森 正)

(3) 八代仙の岩屋 (角 間)

八代仙の岩屋は、宇波川の上流の角間の中田浦地区、角間小学校の東方 2.5kmのところにある。

岩屋は横幅、奥行とも以前は、5間半(約10m)あったが、昭和初年、地震で、くずれてしまった。

岩屋のあるあたりの標高は、約 140m で、大きな広葉樹が、うっそうと繁り、岩屋から 5～6m はなれたところに滝がある。

この滝は、高さ 5m ぐらいあるが、水量はさほど多くない。

昔から、この岩屋を修業場にした修行僧が何人かいたと伝えられるが、方道仙人の伝説もその中の一つである。

今から、700年くらい前、方道仙人は、諸国を巡錫しながら、修行をつんでいた。氷見まで来て、どこか修行場にするのに良い所がないかと探している時、たまたま、宇波川を見つけ、川の兩岸の景色の美しさに見とれながら上流へ向かっていった。だんだん谷は深くなってきたが、そのうちに、大きな岩屋を見つけた。

方道仙人は、「これはみごとな岩屋だ、よしここにこもって身をきよめ、心をみがこう。」と決意し、この岩屋を修行場にして励んだ。仙人がこの地へ来たわけは、垂仁天皇の勅を奉じて、磐津別尊のしゃべられるようにとの石動山霊場での祈願の任があったからである。

仙人にはそんな特命があったこともあって、ここでの修行は真剣であった。やがて身を清め、石動山宝満宮に登り、一心不乱に祈禱をした結果、尊は初めて言葉を発せられ、石動山はいよいよその名を高めた。

やがて方道仙人がこの修行場から去ったあと、大変な日照りの年があった。人々は早ばつを恐れて、方道仙人が修行された八代仙の滝の水で雨乞いをしようということになった。さっそくその水をとってきて、神事をはじめた。そしたら、満願の日、待ち望んでいた雨が降り、村人たちは、不作から逃れることができた。このこと以来、村人は、これは方道仙人の徳のおかげだと信ずるようになった。

今から、50年ほど前にも、日照りが続き、作物が枯れようとした時に、八代仙の岩屋の滝の水を供えて、雨乞いをしたところ、満願の日に、午前中は晴れていた空が、にわか曇り、午後から雨が激しく降り始



め、早ばつをまぬがれたと村の古老は伝えている。

(話者 井田幸二郎・採話者 井田幸洋)

(4) 八代仙地藏 (白 川)

石動山の麓の白川村に「豊七さ」という家がある。その明治初年のあるじ、松沢豊七が、明治4～5年頃の春の或る日、不思議な夢を見た。それは八代仙の谷底に一体の地藏がおられ、その地藏さんが、「豊七さ、豊七さ、わしは八代仙の谷におる地藏じゃが、お前さんの在所へつれていってくれんかの。」といわれたところで、目が覚めた。

——不思議な夢を見たな——と豊七さは思ったけれども、夢のことだからとさして気にもとめなかった。ところが翌日も同じ夢を見た。——いくら夢だといっても、二日も同じ夢を見erとは——とちょっぴり心に残った。さらに三日目も同じ夢を見たので、——こりゃ不思議だ。ともかく夢に見た八代仙へ行ってみよう。——と思い、さっそく夢に見たあたりの谷へ行くため家を出た。

さいわい、その土地の付近に豊七さの耕やしていた畑があり、野良仕事に行っていたので、地形はよくわかっていた。豊七さの家は代々信仰深い家だった。豊七さは細い山坂道の雑草をかきわけて、谷へおりた。あたりを見回しながら谷川のせせらぎぶちを歩いていると、あった。たしかにがけ寄りの木の根本に一体の地藏様がござらっしゃった。豊七さは思わずその場にひざまずいて合掌した。そしておそろおそろ顔をあげて地藏様を拝むとご面相のふくよかな延命地藏だった。

——こりゃもったいない。夢のお告げの通りや——と思いながら、つれましてかえろうと手をかけてみたが、重くてとても持ちあげることができない。「地藏様、せっかく俺にお声をかけて下さりまして、有難うござります。一諸に、おつれ申しとうござりますれど、この年寄じゃとても、重たくておつれ申されませぬ。何卒ぞ明日までもう一日しんぼうして下さいませ。きとお迎えにあがりますけで。」と、ねんごろにお詫びして家に帰って来た。

さっそく在所の力自慢の若い衆数名をたのんで、翌日地藏様のおらっしゃる谷へ行った。晴れわたった明るい日であった。「よいしょッ、どっこいしょッ。」「よいしょッ、どっこいしょッ。」若い衆は力を合わせて、どうにか谷底から上にあげ、そこから白川の豊七さの墓地まで運び、そこにひとまず安置した。その後自分の家の近くの一角を整地し清めて、その地へお迎えした。御像の御丈60cmの地藏様だった。それからは毎日家族の人たちが、朝な夕なかわるがわるお給仕しながらお詣りしている。本当に尊く有難いことやと一家あげて喜んでいいるという話である。

(話者 松沢きく82才。再話者 松沢良雄・採話者 円仏三郎兵衛)

(5) 海を渡った石動山神 (参 考)

越前の国若狭(福井県三方郡)に世久見浦(西田村)というところがある。この在所に湾に突き出た常神岬という、見晴らしのよい海辺がある。むかしもむかしのことやが、この浜辺をある朝一人の漁師が歩いていると、「わしを丘の上へつれていってくれ。」という声がきこえる。漁師はなにか人の声でしたが、と思ってあたりを見回わしたが人影がないので、そら耳だったんだろうと思い歩きだした。

2～3歩行くと、また、「たのむから、わしをつれていってくれ。」という声がした。——たしかにわしをつれていってくれという声がしたが——と思いながら、声のした方の波打ちぎわへ歩いていくと、ザーザーというさざ波が引いたあとに、神様が一体ころがっておられた。「やや、さっきからの声の主は、お前様でござりましたか。どうしてまたこんなところへ、ささ、ま、ともかくおらといっしょに。」と、漁師はご神体をひろいあげて、家につれましてきた。

さっそくこのことを村の長老たちに話したら、そのなかの一人がご神体を見て、「こりゃ石動山の大明神じゃ。どうしたことで、こんなところへ……。」と、もったいながり、村長に、このことを伝えた。村長は、いそいで寄り合いをひらき、このご神体について話しあった。長老たちは、「石動山の神様は漁撈のことも農耕のこともよう守って下される尊い神様じゃ。この村へござらっしゃったちゅうは、きつと良いことがあるしるしや。」と話したので、さっそく堂祠をつくって「石動神社」と名づけ、ていちょうに祀った。それからというもの、この村には、とてもたくさん漁がとれるようになったという。

(原資料、福井県西田村誌)

3. その他にまつわる伝説

(1) 一夜城跡 (中 田)

能登と越中を一望できる石動山は、古くから霊山としてあがめられ、そこには、供奉する坊さんや神官修験道に励む山伏などがたくさんいた。戦国乱世の頃には、こうした人たちが3000人もいたという。特に越後の上杉謙信と通じながら山を守り、天平寺は栄えていた。

ところが、謙信がなくなると織田信長は、石動山のこれまでの寺領5000貫を1000貫に削って、残りを長連龍に与え、その勢力を能登地方へ伸ばしてきた。やがて、前田利家を能登に封じ、織田方の前衛とした。このしうちを恨んだ石動山の衆徒は、或る時、信長の家来である前田利家を狩に誘って暗殺しようと企てた。ところがその日は狩の途中から、大雨になり、しかもこの企てを、ひそかに内通する者が出て果たされず利家は命からがら城に逃げ帰った。

石動山の坊主たちが目的が果たされず、残念がっていた折の、天正10年6月、信長は本能寺で倒れた。石動山の衆徒たちは、「怨敵利家を討つのはこの時ぞ。」と、さっそく越後の上杉方へ連絡を取り、失地回復運動をはじめた。上杉方の救援の確証を得て、さっそく織田方の身代りとしての、前田勢と戦った。

やがて越後からの軍勢の先発が船でかけつけ、中田浦に着き、石動山勢と合流して布陣して本隊のくるのを待った。利家軍もこれに備えて石動山に攻め登るべく進撃してきた。両軍はちょうど荒山峠辺りで遭遇し、激しい戦いが始まった。石動山3000の僧兵のなかには、なかなか武術の業にすぐれた者たちもいた。特に大男で力も強く「石動山の荒法師」といえば知らぬ者がいない豪僧、般若院快存の奮戦はめざましかった。

大薙刀を振り回すごとに、どっと血煙りをたてては、雑兵たちがばたばた倒れる。時には一度に7～8人も薙ぎ倒して、ゆうゆうと謡を口ずさむさまは、実に素晴らしい男惚れのするスカーッとしたさまであったという。

利家軍では、これではどうにもならないと鉄砲隊を繰り出し、一せいに射ち込んで、ひるんだすきに乗じて、石動山の寺坊になりふりかまわず火をかけた。そんな激しい火の海の中でも、快存を中心に、鉏・鎌・熊手・のこぎり・つち・なた・とびなどの七つ道具を持った一団の衆徒たちだけは、ひるむところをしらなかった。利家勢は何とか快存を倒そうと必死だった。

快存は今弁慶ともいわれるほどの荒武者で、前田勢は二度～三度と、たしかに鉄砲を射ちあてたと思うが、快存は薙刀をついてつつ立ったまま一向に倒れない。いくら法力を兼ねそなえている坊主にしても、おかしいと思い、恐る恐る数名の家来が近づいて、腰をかがめて足を引くと、どっと倒れたという。

火は折からの風にあおられて益々ひろがり、やがて、火の手は、石動山の中心の天平寺にまでも及んだ。

ちょうどその頃、越後からは増援軍の本隊が軍船数十艘に乗り込み、石動山めざして進んでいた。敵方が陸地から遠望したとき、いかにも大勢の軍勢がおし寄せているように見せかけるため、それぞれの船べりには藁でつくった人形を並べ、幾本もの流し旗をおし立てて進み、その一隊は先発隊に合流して、上陸をはじめだした。

ちょうどその頃である。幾重にも山脈をしたがえての石動山上一帯から黒煙が立ちのぼり、やがて天をまっかにこがしだした。これを見た越後勢たちは、戦は既に終わったかと、残念がりながら、すくすく越後に引きかえした。それでこの土地の人達は、越後勢が駐屯したこのあたりを「一夜城」と呼ぶようになった。

また、高岡市の雨晴駅うらに「首切り地藏」が安置されているが、これはこの軍船が中田浦めざして進んできたとき、このあたりでどの船も動かなくなった。これは何か魔物のしわざであろうと、一行の侍大将の一人、有坂備中守が上陸して、この地藏を見つけ、さてはこいつのしわざだ、と首を切ったという話が語られている。

(話者 田上栄松・松沢為吉・採話者 円仏三郎兵衛)

(2) 兜池

能登と越中を結ぶ道筋の一つに「荒山越」というのがある。ここから石動山へ登る道がわかれているが、その途中に大柴峠がある。ここは昔、しばしば戦の場になったところだが、その峠の下の方に「兜池」と

いう小さな池がある。

この池はかつて石動山の般若院快存が、加賀の前田利家勢と戦って大奮戦をした所にある。その時、戦い疲れて、甲冑を木蔭に投げだし、水をさがし求めたがどこにもなかった。しかたなく兜を地に置き、大慈大悲の仏に祈念したところ、兜のなかへちよろちよろと水が湧き出してきた。般若院はありがたくその水を口にして、仏恩の広大なことを喜んだという。それからというもの、この小さな水源の湧水地を兜池と呼ぶようになったという。

(話者 嶋尾正一・採話者 高西 力)

(3) 白 河 城 (白 川)

石動山の越中側山麓に白川村がある。この村の北方に、海拔 172m の小高い山があるが、ここに南北朝争乱の頃に、山城があったという。地形的には、石動山登拝七口のなかの一つ、越中口をおさえる要地に位置していた。それで当時は小城ではあったが、戦略上重視されていたようである。

先年まで、宇波と石動山への道との分岐する宮の前の地に、「右宇波道・左石動山道」と刻まれた、道標を兼ねた地蔵が建立されていた。この地蔵は現在は、楯鉾神社の境内に隣接する白川への入口のT字路の所へ移された。

得田氏軍忠状などの伝えるところによれば、正平 14 (1359) 年、越中の国の前守護井上入道暁悟を討つため、北朝方の能登の守護吉見氏頼は、石動山の前衛陣地の白河城を陥そうと、一隊は宇波から、一隊は灘浦道を経て長坂口から迫ろうとした。7月18日長坂に着いた隊は、敵の背後をついて急襲し、一気に落城させようと、攻めたてた。



不意をつかれた井上軍の一部は越路方面へ、主力は味方のいる角間砦の方へと、城を捨てて遁走した。ところが途中で、すでに角間砦を陥落させて、間道から白河城に向かってきた吉見軍の別動隊と遭遇してしまった。

前と後とに敵を受けた井上勢は、いよいよ浮き足立ち、大混乱に陥った。ただ右往左往するばかりで、いくさにはならず惨敗した。いきおいに乗った吉見軍に攻めたてられ、遂に山すその谷底深くへ追い落とされて、ことごとくが玉砕してしまった。

一時は兵馬の死骸で、さすがに深かった谷もうめつくされるほどであった。それで今でもこの谷を「死が谷地」と呼んでいる。また井上勢が逃げ出した途中で、不意に前面に敵を受け、あわてて引きかえそうとしたことから、「馬返し」などの地名もおこった。このほか、白河城の付近には、「城が谷内・城が窪・馬場」などの地名も残っている。

(話者 清水一布・採話者 円仏三郎兵衛)

(4) 人喰虎の掛軸 (長 坂)

長坂の光西寺には人喰虎の掛軸がある。この掛軸は、石動山天平寺に一時住んでいたと語られる画僧の畢生の作だといわれている。光西寺では寺宝として大じにされている。

いつの頃のことか分からないが、この掛軸はもとは、平沢の広瀬平左エ門家に代々家宝として伝えられ同家の土蔵の二階に固くこんぼうされていた。家の伝えには、家長であっても、これに触れることは固く禁じられ、もしも触れれば直ちに不幸なことが起きると言い伝えられてきていた。

その後、13代目の公平のとき、彼は——家長である者はどんな不幸に遭おうとも自分の家の宝を知っておくことは務である。——と考えつめ、梱包を解いてみた。すると中から一幅の軸があらわれ、見事な虎の絵が描かれてあった。公平は、その作品の立派さに驚き、さっそく金沢に行き、表装をした。現在の表装はその時のものであるという。

だが公平はその後まもなく病にかかり、長く床に伏す身になった。公平は、「おれがこんな不治の病になったのは掛軸のたたきだ。」と日夜このことを口にしながら息をひきとった。どうにか葬式も無事終り、49日の法要に、光西寺の普覚和尚が出向いてみると、その掛軸が床の間に掛けられていた。

公平の母は、泣きながら和尚に、「この虎が、かわいい私の子の命をとってしまいました。どうか和尚さん、この掛軸を光西寺へ納めさせてください。いつまでも、お寺において他の人に災難を及ぼさないようにしてください。」と、ことのしだいを語ってたのんだ。

和尚は承知し、さっそく寺へ持ち帰ってから、専門家に鑑定してもらうために、東京の知人に郵送した。しかし、その鑑定がなかなかはかどらないうちに、大震災（大正12年）が起こった。和尚は、あのすばらしい掛軸が再び自分の所へは帰ってこないと思い、大変残念がっていたが、埼玉県のある人から突然手紙がきた。文面によるとその人は、用事で東京に行ったところ、偶然道端に落ちていた虎の掛軸を発見した。拾って帰り、家で見たところ、すばらしい出来栄えに心を動かされ、大切に保存していた。しかし、それからというもの家族に病人が絶えず、次から次へと死亡し、今では家長であるその人一人になってしまった。ある日、易者に占ってもらったところ、「あなたは人喰虎の掛軸を持っているのではないですか。すぐ持ち主に返しなさい。」ということだった。それで、その人は気も転倒せんばかりに驚き、家にかえってしらべてみると裏書に越中国長坂光西寺とかいてあった。だからすぐに引き取ってもらいたい、とのことだった。

和尚は急いで埼玉県のその人の家に行き、無事光西寺に持ち帰った。

それ以来、人喰虎の掛軸は、今でも光西寺に大切に保存されている。

この人喰虎の掛軸は双幅になっていて、一幅は京都の知恩院に移り、今もそこに所属されているという。

（話者 三野修道・採話者 寺崎 洋）

（5） 未 練 坊 （長 坂）

「未練坊」というのは、長坂の住人 源伊勢之助が家の守り神として、大猿を祭った祠である。

全身白毛のこの大猿は、その昔、石動山登山口である血坂に、昼といわず夜といわず妖怪として現れ、石動山へ参る人々に害を加え、恐れられていた。たいへん困った石動山の僧侶が、武術にすぐれていると評判の高かった伊勢之助に、この妖怪退治を依頼した。

伊勢之助は血坂に行き、妖怪の出るのを一晩待ち伏せ、さんざん戦ったすえどうにかこれを切り殺すことができた。

夜が明けてみると、しとめた妖怪は大きな大きな老猿だった。伊勢之助は大猿をかついで長坂に帰る途中、この大猿がにわかに生きかえり、伊勢之助の背中から顔をおこして首にかみつ、「おれは、長年修行の末、あの世とこの世を行ったり来たりできる神通力を得た。お前は、おれを殺したと思っているが、おれには生死の区別などない。しかしお前はおれを切りつけた。今こそお前の生命をとってやる。」と呻くようにさげんだ。

伊勢之助は、かみつかれた首から流れ落ちる血を片手でおさえ、やっとの思いで痛みをこらえながら、「そうであったか。されどそれほどの神通力のあるものが妖怪としてあらわれ、善人を苦しめる悪事をはたらくとは、納得がいかない。わしには長坂のためにしなければならない仕事がある。まだたくさん残っている。ここで死ぬのは、たいへん残念だ。もし、お前が今死んでくれて、わしが仕事をなしとげるまでわしの命を長らえさせてくれるなら、お前をわが家の守り神として、末代まで敬い祭ることにしよう。」といいながら必死で石動山権現を念じた。

雲にかすむ石動山に向かって、「わしの願いを権現様様どうか聞いてくだされい。」というのと、不思議なことに大猿は、がっくりと頭を垂れて死んでしまったという。

彼はその後、残った仕事をみんなし終えたとき、家の近くに祠をたててさきの大猿をねんごろに祭った。そのあと、自分は死期が迫っていないのに、大がめの中に入り、守り神との約束を果たすために土中深くで念仏しながらゆうゆうと大往生を遂げ、即身仏になったといわれている。

（話者 三野修道・採話者 寺崎 洋）

（6） 宗 良 親 王 （小 境）

建武2年12月、武運つたなく石動山で敗死した越中の国司中院定清に荷担した石動山衆徒たちも、不幸であった。悶々とした時を過ごしていた折、幼くして延暦寺の座主となられた、後醍醐天皇の第八皇子、宗良親王がこの地にこられた。

皇子は宮方（南朝）の再興を計るため、興国2（1341）年、越後の寺泊から舟で、石動山麓にあった小

境の大栄寺にこられた。おそらくかって宮方の中院定清にしたがった石動山の衆徒たちに期待をかけられてのことであつたろう。

親王はしばらく大栄寺に滞留なさり、ここで剃髪までせられたという「髪塚」が今に伝わっている。親王は、国司中院定清が戦死したと伝える、石動山頂から東へ、およそ1キロほど離れた焼尾の台地などものばれながら、石動山衆徒たちの南朝方への協力に如何に望みをかけられたことであつたろうか。まことにいとしい限りである。

定清の本陣が築かれたという焼尾の尾根には、巾約2mぐらいの、二重に掘りめぐらされた当時の壕跡が、今も崩れてはいるが名ごりを止めている。
(原資料 氷見市史)

(7) 三つ山長者 (角 間)

角間小学校の西北約200mほどの後方に、標高300mの小山がある。この山中に直径約20m、高さ5mぐらいの人口的な丘が、三つ鍋の足のように行儀よく並んでいる。土地の人たちはここを「三つ山」と呼んでいる。とても眺めの良い所だが、その三つ山のすぐそばに「長者屋敷」という屋敷跡がある。

この屋敷にはいつごろだれが住んでいたかはっきりしないが、昔、大へんな長者が住んでいたと、伝えられている。生活が豪華で風流なものだったということから、都からの落人か八代庄の豪族だったのだろう。ともかくその暮らしはけたはずれのものであつたという。

ある時、石動山の修業僧がこの家に立ち寄った。長者はその僧をよろこんで迎え、鄭重にもてなした。やがて何を思ったのか、「わしは貧乏というものを知らんのだが、一度でいいから、貧乏というものをしてみたい。どうしたら貧乏になれるじゃろうか。」ととんでもないことを聞いた。僧はしばらく目をつぶって考えていたが、やがて、「足投御膳に、引ずり茶わんで、毎日食事をしたら、きっと貧乏になれましょう。」と語った。

あくる日から長者は、さっそく教えられた通りに行ったところ、数年足らずで貧乏になってしまった。その頃になって長者は、「しまった。わしはとんでもないことをしてしもうた。」と後悔したが、あとのまつりだった。しかたなく、最後に残った家宝の「漆千杯と朱千杯、黄金の鳳凰一つがえ」を三つの山を築いて、それぞれの山の中へ一品ずつ埋め、いずこともなく去っていったという。

その後、毎年正月の元日の明け方になると、三つの山の上に、黄金色に輝く鳳凰が現われ、初日ののぼる東の空に向って、「東天紅、東天紅、東天紅」と美しい声で三声鳴き、その姿を消していく。村の者たちはこの声をきくと、「元日早々大へん縁起がよい。これはきっと、石動山権現様が、今年も精だしてまめに働けと、つかわされた鶏だろう。」というて、その鳴く声を聞くのを喜んだ。この評判はたちまち近郷近在に伝わっていった。

あるとき、氷見の鏡研ぎが旅まわりをし、灘波（今の大阪）へ行った。いろいろとお国自慢をしている間に、この三つ山の話をしたら、みんながびっくりしたと。なかのひとりがさっそく、十数人の人夫をつれて氷見へやってきた。どうにかこの三つ山をさがしあて、すぐに掘りおこしにかかったと。するといつ天にわかに曇り、大きな雷が鳴って地面を引きさくようなすさまじい、火の雨が降りそそいだ。一行はこれのおそろしい豪雨に耳をおおう間もなく、命からがら逃げ帰った。

それからは、元日になっても黄金の鶏の姿は現われず、鳴き声もさっぱり聞かれなくなった。村人たちはこのことを大へん惜しみ悲しんだという。

(話者 井田幸二郎・採話者 東 雅夫)